
放課後の番人

真中成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後の番人

【Nコード】

N4251BA

【作者名】

真中成実

【あらすじ】

放課後の番人。別名旧校舎の番人 ―学校の闇の存在。
困ったことがあった時、旧校舎の靴箱の右から三番目、上から五番目に依頼書とチョコクッキーを入れる。すると放課後の番人が現れて問題を解決してくれる。

涼はクラスメートの法子と「放課後の番人」の正体を探ろうとするが…。

一時間目（前書き）

勉強不足なので読みづらい点もあるかと思っています。

もし分かりづらい点がありましたら、どんどんご指摘お願いします！

一時間目

ぼくも単なるうわさだと思っていた。有名アイドルに熱愛発覚だとか、学校の七不思議とか、誰々先生がツラだとか、そういったどうしようもないうわさが出回るのはよくある話だ。

そして、これもうちの高校に流れている「どうしようもないうわさ」の一つ。

旧校舎の番人。放課後に現れて、学校の問題を解決する闇の存在――そんな奴が存在しているとは到底思えなかった。もう使われなくなった旧校舎。その靴箱の右から三番目、上から五番目に依頼書とチョコクッキーを入れる。チョコクッキーはややビターなものがお好みらしい。誰がどこから奴の好みなんかを知ったのか、それはよく分からない。

旧校舎の番人への依頼書を書くにあたって、守らなければならないことがある。自分の氏名と出席番号を明記すること、依頼書の入った封筒のおもて面に「旧校舎の番人様」と書くこと、そして、「の」と「番」の間に星印を入れることだ。つまり、こう書けばいい。

旧校舎の 番人様

依頼が解決すると依頼主の靴箱にこんな手紙が入っている。

依頼は滞りなく完了しました。あなたに平和な日常が戻りますように。

旧校舎の番人

こんな怪しげな内容にもかかわらず、旧校舎の番人のうわさは学校中の人間が知っていた。職員会議にも何度かのぼったらしい。あながちうそとも思えないのは、三年一組の。が盗まれた財布を取り返してくれるように依頼したら、靴箱の中に手紙と財布が入っていた、とか逆に××をいじめた生徒が旧校舎の番人にやられたらしいなど、ここ二、三か月の間にもやつに関する新しいうわさが生まれていることだ。学校の中でも放課後の番人の存在を信じている人は多い。

梅？春奈もうわさを信じている一人だった。

春奈は、ぼくと同じ吹奏楽部の部員で、最近遅くまで夏のコンクールに向けて、夜遅くまで練習を行っていた。

「そこ、テンポ遅れてるよ！」

春奈の声が響く。春奈は特に部長や副部長というわけではなかったし、他の部員と比べてそれほど演奏がうまいわけでもなかったが、

持ち前の明るさと、ひたむきに努力する姿が、彼女を部のムードメーカーにしていた。

「せんばーい、もう三時間も練習してるんですよ。少しぐらいずれても仕方ないじゃないですかあ」

後輩たちが音をあげる。

「疲れてるのは分ってる。でも夏の大会まであと一か月しかないんだよ。ほらあともうひとふんばりだよ。もう一回合わせよ」

春奈が笑顔でそう言つと、ぼくを含めた部員たちはみなやらなくてはいけない、という気持ちになるのだった。彼女はとりたてて美人でもかわいいわけでもなかったが、彼女の丸顔と笑ったときに見えるくぼが彼女に一種の愛嬌をあたえていた。その愛嬌のおかげで春奈は、男女問わず部長や副部長を含めたほとんどの部員から信頼され、愛されていた。ただ一人を除いては。

その一人というのが、いわたゆういち岩田祐一だった。祐一は一年生で、ぼくや春奈より学年が一つ下だった。

「祐一くん、みんなで昼ごはん食べようと思うんだけど、一緒にどう？」

と春奈はちよくちよく祐一を昼飯に誘っていた。祐一が吹奏楽部にうまくなじめていないのを気にしていたのかもしれない。その誘いに対する祐一の返事はいつも同じだった。

「いいです。おれ一人で食べるんで」

一匹狼をきどっているのか、人が苦手なのは分らないが、後輩として、同じ部員として祐一は非常に扱いづらい存在だった。春奈以外のすべての部員が彼を避けた。

同じサックスのパートを担当しているばくもその一人だった。

ばくは祐一の教育係を頼まれていたので、彼がうまくいかないときにはアドバイスをすることがある。例えばこんな感じで。

「もうちょつと指をきちんと押さえてみようか。もっという音が出ると思うよ」

どういう言い方をしようと、祐一の返事はいつも同じだ。

「いや、自分でも分かってるんで」

一度春奈に祐一に対する不満をぶつけたことがある。

「あいつ、全然ばくの言うこと聞かなくてさ。一回ガツンと言ってやろうかな」

そんなばくを春奈はこうなだめた。

「ほら、祐一くんも頑張ってるから……。あんまり責めないであげて」

ばくはこの春奈の言葉が理解できなかった。祐一が頑張ってる？いつも居残り練習しないで帰るあいつが？誰よりもあきらめの早いあいつが？

そんな状態の中、決定的な出来事が起きた。

ついに、祐一は居残り練習だけでなく、部活自体もさぼるようになったのだ。最初の一日は、風邪だろう、と片づけられた。それが二日たち、三日たち、ついに二週間たった。

ちょうど二週間目の練習終わりに先輩に呼びだされた。

「涼。ちょっといいか？」

自分の名前を呼ばれたばくは、言われるがまま校舎裏について行った。

「何かあったんですか？」

「祐一が休んでるの知ってるだろ？」

「はい、知ってますが」

嫌な予感がした。

「涼、祐一と仲いいだろ？」

「いや、それほどでも……」

「おれたちと比べれば仲いいだろ？」

どうやら答えは一つしか選べないらしい。

「はい、まあ……一応」

「涼があいつに一言いつてやってくれないか？ちゃんと部活に来るように」

「は、それはちょっと…」

「じゃあ頼むよ」

肩をたたかれた。ここまで物事が進むといつもぼくは無言になる。無言は承諾の合図だ。自分の優柔不断さにへどがでた。

ため息をついたまま、祐一にメールを打った。話がしたい、と。

祐一は約束の時間より三十分遅くやってきた。いらいらしながら、ぼくはできるだけおだやかに言った。

「最近、部活来てないけどどうしたの？」

一瞬沈黙があった。

「練習はきちんとしてるんで」

「そういうことじゃないだろ！ちゃんと来ないと一応吹奏楽部員なんだから」

「何で来なくちゃいけないんですか」

今度はぼくのほうが無言。答えが思い浮かばなかった。

「ほら、みんな心配するだろ」

「本当に心配してるんですか？」

ぼくはできるだけ笑顔で肯定しようとした。ただその笑顔が引きつって結果的に否定の笑顔になった。

フンツと祐一が皮肉を交えて鼻を鳴らした。

「これで話はおしまいですか？おしまいなら、失礼します」

帰っていく祐一の背中を見ながら、ぼくは一言も返せずにたたずんでいた。祐一の言うとおりだ。みんな祐一を心配して言ってるんじゃない。自分の後ろめたさをごまかしたり、メンツや立場を守るために言ってるんだ。くだらないやつらだ。

そして自分もそのくだらないやつらの一人であることに気づいて、ぼくは肩を落とした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4251ba/>

放課後の番人

2012年1月11日10時47分発行